

石田高生著

## 『オーストラリアの金融・経済の発展』

日本経済評論社 2005年 ix + 435ページ

いし がき けん いち  
石 垣 健 一

本書は2世紀にわたるオーストラリアの金融・経済の発展を金融史の観点から研究したものである。著者によれば、金融史の観点からオーストラリアの金融・経済の発展を研究するメリットおよび意義は以下の点にある。第1に、オーストラリアの歴史が1788年の入植開始から現在まで約2世紀ほどに過ぎず、しかもそれが近代ヨーロッパの始まりからスタートしており、近代銀行システムあるいは金融システムの性格を研究するのに最適な歴史である点である。すなわちオーストラリアの金融史は当初から近代金融システムの発展過程として検討することができる点にある。第2に、19世紀から20世紀にかけてのヨーロッパの経済発展や金融システムが政治的混乱や戦争によって大きな影響を受けたのと対照的にオーストラリアのケースでは比較的安定した長期の経済発展と金融システムの展開をたどることができる点である。第3に、オーストラリアとその宗主国であるイギリスとの貿易関係はいわゆる2国2財モデルにおける経済発展の実例としてみる点である。特に19世紀後半オーストラリアの羊毛輸出とイギリスの工業製品輸出の関係が、リカードの言う比較優位論が妥当する2国2財モデルとして典型的に当てはまり、オーストラリアの経済発展が促された点である。経済学は実験のできない学問であるがよく指摘されるが、19世紀のオーストラリアの経済発展の過程はこのモデルの典型的な適応例として最も適切な研究対象である。第4に、中央銀

行制度の成立以前にはほぼ1世紀に及ぶ近代的な預金銀行制度の歴史が存在しており、中央銀行との関係や制約なしに、純粋に民間銀行制度の機能と金融システムとの関係を検討できる点である。

著者は、本書において、以上のような幅広い研究上の意義を強調し、オーストラリアの金融システムと経済発展の関係について研究を進めているが、その研究の力点は、後の本書の内容の検討によって明らかになるように、オーストラリアの実体的経済発展の分析それ自体よりも貨幣制度や金融システムが経済の発展にどのように寄与してきたか、あるいは実体経済の発展や特殊な産業構造が金融システムにどのような影響を与えてきたかにかかっている。

さらに著者は銀行制度および金融システムの発展を分析する際に、2つの視点の重要性を指摘する。第1は、オーストラリアの銀行や金融システムの「特殊性」(カッコは評者)である。著者は、貨幣・金融の分野は経済学上優れて理論化された分野でもあり、理論上の「普遍的」課題から金融システムの発展を明らかにすることも意義のあることであると認めながらも、オーストラリアの銀行制度はイギリスの近代銀行および金融システムの導入から始まり、羊毛・農業・鉱業を中心とする産業構造の特殊性を背景に発展し、イギリスとの貿易・資本取引に関する為替システムの特殊性を持ってきたとして、オーストラリアの銀行・金融システムの「特殊性」を歴史的に明らかにする。

第2は、準備の問題である。中央銀行制度が十分成熟しなかった時代には民間銀行にとって現金準備はきわめて重要な問題であった。また近代的な中央銀行制度および集中決済システムの発展のうえで、準備の集中が極度に進み、中央銀行の準備預金が貨幣政策上の基点となっているとし、準備の問題を中央銀行の貨幣政策の手段として法制化した支払準備制度が金融の自由化が進展するなかで廃止ないし軽減されてきたとしても、銀行・金融システムにおける準備の性格と機能をどのようにとらえるかが大きな課題であることに変わりないとして、銀行準備の重要性を強調する。著者のこの2つの基本的視点は本書を通じて貫かれている。この2点に関しては

においても一度触れることにする。

著者はオーストラリアの経済・金融制度の発展を、4つの段階に時代区分している。第1期は植民地の創設から1850年まで(第1章)、第2期は1851年のゴールド・ラッシュから1900年まで(第2章から第7章)、第3期は1901年のオーストラリア連邦の形成から第2次大戦終了時まで(第8章、第9章)、第4期は戦後である(第10章)。

本書の章構成は以下のとおりである。

#### 序 章

- 第1章 貨幣・銀行制度の成立過程
- 第2章 経済成長の構造的特質
- 第3章 預金銀行の発展
- 第4章 外国為替取引とロンドン勘定
- 第5章 牧羊金融の展開と貸付政策
- 第6章 金融市場の確立
- 第7章 金融恐慌の特殊性
- 第8章 製造業の確立と通商・産業政策の展開
- 第9章 中央銀行制度の成立と金融の規制
- 第10章 金融の規制緩和と貨幣・為替政策

各章で取り上げられている問題について簡単に紹介したい。

第1章では植民の開始当時から19世紀前半の貨幣・通貨制度の実態についてまず説明がなされる。流刑植民地として出発した背景の下で、物資の配給所が発行したストア・ノートの使用から始まって、大蔵省手形、銅貨の利用、そしてマックワリ総督による通貨制度改革、1820年代後半からの牧羊業の発展過程、通貨制度の整備過程、株式銀行の設立と業務、外国為替制度とイギリス植民地銀行の進出について検討し、初期の貨幣・通貨制度の混乱からどのような過程を経て、オーストラリアの近代的な貨幣銀行制度が成立したかが簡潔に、要領よくまとめられている。

第2章では1850年代のゴールド・ラッシュとそれに続く農鉱業、特に牧羊業の発展が、オーストラリ

ア経済の繁栄とそれを支えた金融システムの発展をどのようにもたらしたかを明らかにしている。ここでは19世紀後半の資源開発および鉱山業の発展とその影響、牧羊業の西部および北部地域への外延的拡張と農・牧羊業の技術改良の進展と発展ならびに土地制度の変化、オーストラリアの貿易構造と国際収支の構造、さらに鉄道建設や関税制度など当時の経済発展の諸問題について幅広く検討されている。

第3章では、オーストラリアの金融システムがはじめて体系的に形成され、その特質が展開された19世紀後半の時期における預金銀行の設立と支店銀行制度の発展が取り上げられている。特に、預金銀行の設立と資本金、支店制度の拡張と銀行の組織管理、預金業務と負債分析、銀行券と準備、銀行の財務政策について検討される。著者は当時の預金銀行の行動を調べるに際し、銀行統計に不統一と不備が存在し、また植民地全体の統計に齟齬と不備が存在するために、信頼性が高いと思われるオーストラリア準備銀行の統計とS. J. Butlin, T. A. Coganらの過去の業績に依拠しながら、当時の代表的銀行であったオーストラレーシア銀行やオーストラリアユニオン銀行の実例をひきながら分析を進めている。その際に著者は、オーストラリアの銀行は国内預金だけではなく、イギリス預金を導入して、牧羊業の旺盛な開拓資金需要を満たしたことを明らかにしている。そして19世紀後半に、預金銀行の預貸率が異常に高いのは、国内預金や銀行の自己資金ではなくて当時の銀行統計に含められていないイギリスからの借入れと預金の導入によって貸付けがなされたと主張し、イギリスからの資金導入がオーストラリアの経済発展や金融全体の特殊的構造を反映していると指摘している。

第4章はオーストラリアとイギリスとの外国為替取引のメカニズムとオーストラリアの銀行のロンドン支店の機能を明らかにする。著者によれば、これまでのオーストラリアの研究者でこの分野の研究で名高いS. J. ButlinやR. F. Holderの研究は大蔵省手形を中心とした対外決済機構と外国為替市場や輸出金融および為替レートについて関心が向けられており、オーストラリアの輸入商人に対する銀行の融資制度

および外国為替制度との関係を十分に明らかにしているとはいえないと指摘し、輸入金融を含むオーストラリアとイギリスとの外国為替取引の特殊性を明らかにしている。著者は、オーストラリアの代表的銀行であったNSW（ニュー・サウス・ウェールズ）銀行、NBA（ナショナル・バンク・オブ・オーストラレーシア）銀行、BOA（バンク・オブ・オーストラレーシア）銀行などのロンドン支店のバランス・シートや外為勘定、いわゆるロンドン勘定などの第1次資料を分析し、各銀行のロンドン支店の機能や外国為替操作の実態を詳細に検討した結果、オーストラリアとイギリスとの間の貿易決済の特殊性は、オーストラリアの輸出決済は植民地支店によるロンドン宛為替手形の買取り、すなわち逆為替方式で行われ、その輸入決済はロンドン宛ドラフトの振り出し、つまり並為替方式によって行われたことにあることを明らかにしている。

第5章は19世紀後半の経済発展の原動力であった牧羊業が取り上げられる。まず牧羊業の発展と構造を牧羊をめぐる土地問題、地理的分布の拡大と牧羊生産額の増大などの観点から検討し、その発展を支えた牧羊金融の構造、預金銀行の牧羊貸付の方法、担保構成と資産管理について検討している。著者によれば、牧羊金融（パストラル・ファイナンス）に関する研究対象および関心は、従来オーストラリア独特な金融機関であり、牧羊業向けの専門的金融機関であった牧羊金融会社による牧場の経営支配におかれていたが、ここではこれまでほとんど考察されてこなかった預金銀行の牧羊業に対する不動産抵当貸付の方法、不動産担保の管理およびその流動化を取り上げている（牧羊金融会社の活動は第6章で取り上げられている）。著者はBOA銀行やNSW銀行、NBA銀行などの当時の貸借対照表の分析によって預金銀行の貸付方法および貸付形態を明らかにしている。1860年代NSW銀行などのオーストラリア系預金銀行は手形割引から当座貸越しに貸付方法を転換しているのに対して、イギリス系銀行は牧羊業者への直接貸付けの際には当座貸越しよりも約束手形による手形貸付を多く利用していると指摘し、この特殊性はイギリス系銀行がイギリスの銀行の銀行原

理に依拠したためであると指摘している。さらに銀行は牧羊貸付の結果、各種牧羊資産の抵当権を担保として保有したが、特に羊毛先取り権を利用して羊毛委託販売に参入し、金融的利益とともに羊毛委託販売からの商業的利益をも獲得していたという19世紀後半のオーストラリアの預金銀行の特質を明らかにしている。

19世紀後半の経済発展と国民所得の上昇は、預金銀行の内外決済機能と資金仲介機能を高めると同時に預金銀行とは異なるオーストラリア独特の金融機関を生み出し、証券市場の発展を促すこととなった。第6章では、この時期に牧羊金融において中心的役割を果たした牧羊金融会社をまず取り上げ、その機能、役割を明らかにし、同時に牧羊金融会社と預金銀行との競合関係と相互補完関係に検討が加えられる。またこの時代は都市開発が急速に拡大した時代でもあった。都市部での資金仲介を行う金融機関、すなわち貯蓄銀行、住宅金融組合、不動産投資会社、土地抵当銀行の発展について検討されている。さらにオーストラリアの株式会社の発展とメルボルン証券取引所の発展とその特色が検討されている。

19世紀後半、特に1860年代から80年代の30年間は発展と繁栄の時代であった。しかし、1890年代のオーストラリア経済は、90年のイギリスにおけるペーリング恐慌の発生とそのオーストラリアへの影響、93年の金融恐慌やその後の長期早魃による牧羊業の長期不況を経験することになる。この時代に生じた経済的困難と混乱は、外的要因によるもののほかに、オーストラリア固有の経済構造や金融システムの欠陥を内在的要因にしたものでもあり、オーストラリアの貨幣・金融システムに大きな影響を与えた。著者は、第7章で、1890年代のこれらの金融的破綻について、過去の多くの研究成果を利用しながらも、著者自身の分析方法、すなわち金融機関の4半期ごとのバランス・シートおよび損益計算書に焦点を当てて、オーストラリア経済・金融制度が金融恐慌によって影響を受け、その変更と展開をいかに遂げていったかを明らかにしている。

1901年、オーストラリア連邦が結成され新しい時代が始まった。第8章は、連邦結成から第2次大戦

終了までの時期のオーストラリア経済の発展について検討が加えられている。この期間に生じた2つの大戦や大恐慌がオーストラリアの貿易構造と国際収支の変化、製造業の確立と産業政策、連邦政府の財政構造、そして経済変動と成長に与えた影響について一般的に検討がなされている。この40年あまりの間に第2次大戦後の国内制度上の基礎的な枠組みが形成され、かつ第9章で取り上げる貨幣・金融政策の基盤となる経済構造が明らかにされている。

第9章では前章で検討されたオーストラリア経済の構造と成長を背景として、同時期の貨幣・金融システムの問題を検討している。第1は貨幣・通貨制度の問題である。オーストラリア連邦の成立は母国イギリスからの政治的独立性を高め、イギリスとは異なる貨幣・通貨制度の整備が進められた。1909年貨幣法の成立、10年オーストラリア連邦政府によるオーストラリア紙幣の発行によって通貨発行システムが整備され、さらに中央銀行による通貨発行システムの確立を経て、近代的な通貨システムが成立するに至る。この時期はまさに金本位制から管理通貨制度への転換期にあたり、貨幣制度の基本的な課題が浮き彫りにされ、紙幣および中央銀行券の発行方法、兌換制の兌換準備の意味、不換制下の紙幣の流通根拠の問題が検討される。第2は中央銀行制度の問題である。1912年のオーストラリア連邦銀行の設立とその後の中央銀行への整備の過程をたどり、中央銀行システムの基本的機能と金融政策の主体としての基本的課題を検討している。第3は国際通貨制度の変化とオーストラリアの金融制度への影響についてである。国際通貨システムの変化が貨幣制度および中央銀行整備過程にどのように影響を与えたかについて明らかにしている。特にその過程に重大な影響を与えた1937年の貨幣銀行委員会報告書の諸勧告について検討している。

本書の最終章である第10章では、第2次大戦後から2000年ごろまでの時代を対象にして、戦後オーストラリアの金融システムの課題を取り上げている。そこでは、中央銀行制度の整備過程として準備銀行の設立と貨幣政策、規制の強かった金融システムの規制緩和へ向けての動き、インフレーションと貨幣

政策のあり方、為替レート的大幅な変動と為替政策のあり方、が検討されている。

400ページを超える大著にして長年の研鑽（前書きによると網膜剥離をわずらわれたという）と現地での第1次資料を利用して完成された本書のような立派な金融史の研究書を書評することについて評者として適切であるかどうかについては疑問なしとはしない。評者は歴史学者ではない。主として現在の金融政策について研究しているものであり、歴史家としての素養もないし歴史研究者としての実績もない。ただオーストラリア経済の研究といういわば経済学会の主流から外れ、また専門家の層の薄い分野でたまたまオーストラリアの金融を研究対象とし、著者と面識もあり、オーストラリアで歓談をしたり、現地で第1次資料の利用でご苦労されている著者を垣間見たものとして、本書を手にし、読ませていただいた感想を記させていただくことで書評に代えさせていただきたい。

本書のオーストラリア金融・経済の研究に関する貢献の第1は、オーストラリアの金融・経済の発展を植民地開始の時期から現在までにわたって取り上げ、歴史的に通観したことである。しかも著者単独でこれを成し遂げている。この分野の日本における最初の研究業績であろう。ある時期、ある分野について優れた専門的研究成果が発表されたことはあったが、200年にわたる金融・経済の発展を跡付けたことは、いわばオーストラリアの経済的歴史的地図を書き上げたようなものである。オーストラリア経済のさまざまな時代や分野について興味を持ち、研究を進めようとする人にとって、この著書は全体的構図のなかで、自分の研究の位置を確認し、さらに進むべき方向や道筋について貴重な示唆を与えてくれるはずである。

本書の第2の貢献は、特に金融分野の分析において、オーストラリア国内の過去の代表的な研究成果や日本の研究者の成果のみならず、オーストラリアの金融機関の第1次資料を獵採し、その資料を駆使

して著者独自の分析を展開しているところである。本書の第3章、第4章、第5章において特にそうである。すなわち19世紀後半期において金融分野で経済発展において重要な役割を果たした預金銀行や牧羊金融会社の預金・貸付活動、および外国為替取引活動について当時の代表的な預金銀行の貸借対照表や損益計算書を詳細に分析し、牧羊金融に関するオーストラリア独特の貸付方法や担保構成そして外国為替取引とロンドン勘定においてオーストラリアの研究者がこれまで手をつけていない問題について独自の分析を展開している。また牧羊金融については従来牧羊金融会社に焦点が当てられがちであったのに対して、著者はむしろ預金銀行の牧羊金融に果たした役割を、そして預金銀行と牧羊金融会社との相互補完的な関係を明らかにしている点が独自である。

第3の貢献はオーストラリアの貨幣制度、中央銀行制度、預金銀行制度とその活動、特に植民地発足当時から第2次大戦前までのことが各種の資料を利用して詳細かつ具体的に明らかにされている点である。この点は日本の研究では、これまであまり焦点が当てられなくて空白のままであった部分であった。本書によって空白が埋められた。

評者が見逃している本書の貢献はほかにもあると思われるが、ここでいくつか気になった点を最後に指摘しておくことにしよう。

第1は、本書はオーストラリアの金融・経済の約200年にわたる発展を歴史的に跡付けたことについては先に貢献の第1にあげたところであるが、しかし金融については別としても、経済の発展について十分な分析がなされているかといえ、そうとはいえない。本書は主として金融が経済発展にどのように影響を与えたか、あるいは経済発展が貨幣・金融制度の発展に与えた影響について書かれた本である。実体経済の発展を問題にするとすれば、金融以外の労働力、資本形成、土地、技術進歩などの諸問題が本格的に取り上げられなければならないであろう。特に第10章の第2次大戦後の実体経済についてはほとんど触れられていない。1980年代に始まり、90年代深化し、まれに見る良好な経済パフォーマンス

を示している今日のオーストラリア経済の発展は金融分野を含む経済全体の構造改革が大きな影響を与えているからである。

第2は、著者は銀行制度および金融システムを分析するにあたって2つの点に注意を払うと主張している。「特殊性」と「準備」である。「準備」の問題は次に取り上げるとしてここでは「特殊性」について考えてみることにしたい。1国の経済や金融制度の発展を歴史的にみると、その「特殊性」に注目して検討を加えるというのは正当性のあることであろう。しかし現在および将来についての発展を見通すとき、過去の時代の「特殊性」は将来のための道標になるのであろうか。むしろ「特殊性」ではなくて「普遍性」、いいかえれば理論こそがその役割を担うとすれば、著者自身が触れていたように「特殊性」のなかに「普遍性」を見出すことが重要ではないのか。経済の分野なく金融の分野はグローバル化の進行が激しく先進国のケースでは市場が統一され、同質化されていくのではないのか。この過程のなかで金融システムの「特殊性」はどのような意味を持ちうるのであろうか。

第3は、「準備」の問題である。著者は中央銀行制度の最終的アンカーとしての中央銀行準備、最終的貸し手の機能を重視する。したがって準備の問題は通貨システムを分析するうえで基本的問題となるとして本書でしばしば取り上げられている。評者はこの見解に半分だけ賛成である。金融システムの安定性ということからすればまさにそうである。日本のつい先ごろの問題を考えれば中央銀行準備の重要性は理解できる。しかし金融政策の有効性ということからいえば、日本のケースでもそうであるが（日銀当座預金をいくら増やしてもデフレは解消しないという意味）、オーストラリアも含めて多くの先進国の中央銀行準備はもはや金融政策上重要ではない。オーストラリアやカナダなどのケースでは中央銀行準備も含めてマネー・サプライは内生変数である。貨幣量重視の政策から金利政策重視の政策への変化は規制緩和がもたらした金融システムの変化と同時に金融政策理論の変化がもたらしたものであり、したがって「準備」の重要性も時代状況や理論の変化

とともに変わるものである。

ここで提起した点について明快な解答を評者が持っているわけではない。歴史研究も理論研究もともに重要であり、両者の共同作業がこれからも必要であるということであろう。

本書はオーストラリア経済の金融史研究者が、長

年にわたるご苦労の末に書き上げた労作であり一級の著書である。それだけに手軽に読める本ではない。手にとって努力して読んでいただければ、オーストラリアの全体的歴史的な経済像が読者自身のものとなり、自らの研究の進化に大いに役立つと思われる。

(神戸学院大学経済学部教授)